

茶路川筋の アイヌ語地名

第3回

○オサツペ（御札部）

「オサツペ」は、国道392号沿いにある信光寺の裏手を流れる川の名前で、町内会名にもなっています。

「オ（川尻が）・サツ（かれている・乾く）・ペ（ところ）」という意味で、川の水が川底の下にもぐって伏流水となるため、川尻では水が見えないところからその名がつけました。



真光橋とオサツペ川

年（明治31年）、茶路の土地の貸付願を出し、炭鉱経営から撤退する1902年（明治35年）ころま

り、山田秀三の『北海道の地名』では、弟子屈町と函館市南茅部の「尾札部」が紹介されています。

同様の地名は道内にいくつもあり、尾関一男氏の『茶路開拓史 明治から大正にかけて』には、明治30年代に、二人の炭鉱経営者が茶路で、北海道国有未開地処分法に基づき土地の貸し付けを受けていたことが記されています。

■炭鉱経営者が農場経営？

安政年間に幕府が開いた炭山の閉山から33年後の1897年（明治30年）6月、東京の肥田照作が刺牛地区に炭鉱を開き、まもなくその隣で函館の磯部榮基が採炭を始め、白糠に再び炭山の灯がともりました。

そしてこの二人は、翌1898年（明治31年）、茶路の土地の貸付願を出し、炭鉱経営から撤退する1902年（明治35年）ころま

り、山田秀三の『北海道の地名』では、弟子屈町と函館市南茅部の「尾札部」が紹介されています。

同様の地名は道内にいくつもあり、尾関一男氏の『茶路開拓史 明治から大正にかけて』には、明治30年代に、二人の炭鉱経営者が茶路で、北海道国有未開地処分法に基づき土地の貸し付けを受けていたことが記されています。

○フレペツ（川）

「フレペツ川」は、茶路川西岸にある川西共栄地区の沢から出てしばらく南下し、大苗で茶路川に注いでいます。

「フレ（赤い）・ペツ（川）」という意味で、川底の沈殿物によって川が赤く見えたことから、そう呼ばれました。

「赤い川」のもとになっている沈殿物は、川の水に含まれている鉄分が細菌によって酸化され、細菌が死んで残った酸化鉄が川底にたまったもので、鉄が錆びた色（赤茶色）をしています。

同じ意味の地名に「フレナイ」があり、町内でも庶路川や和天別川の支流にあるほか、全道のいたるところにあります。



フレペツ川

■「赤い川」の伝説

「赤い川」にまつわるアイヌ伝説として「パシクル伝説」の中に次のような話があります。

昔厚岸のアイヌが舟で攻めて来たことがあった。この戦いは白糠アイヌが不利になり、この沼地のところで多くの人が戦死し、その死体にカラスがたくさん集まって騒いでいたのでパシクルと名付けたという。さらに音別へ寄ったところフレナイ（赤い川）という小川がある。この川はその戦いとき、白糠の首長が厚岸アイヌの毒矢にあたって倒れ、その血が真つ赤に川を流れるのを海から見ている厚岸アイヌが、フレナイと名付けたという。

（貫塩喜蔵エカシの話／『アイヌ伝説集』（更科源蔵）から引用）